

路面電車のある都市景観の特性と住民意識に関する考察 —豊橋市を事例として—

小野晃伸

1. 研究の背景と目的

近年、路面電車が環境や交通弱者に優しく、街の活気を取り戻すために有効な交通機関として注目を集めている。路面電車の機能を様々な面で向上させ、都市機能を中心部に集中することでモータリゼーションから脱却し、コンパクトなまちづくりが可能だとされている。日本では、モータリゼーションの進展とそれによる都市内道路の混雑と都市の郊外化は未だ続いているため、路面電車を保有する都市では、路面電車の価値を見直し、路面電車を軸とした交通網の整備を行う動きが起った。そのような路面電車を保有する都市では、交通面だけでなく、景観面においても路面電車を都市景観の重要な要素と位置づけていることが多い。しかし、路面電車を保有する都市では、路面電車のある景観が重要視されているのだろうか。それは、都市に路面電車の車両やその軌道施設が存在することが、景観に「良さ」や「わかりやすさ」を与えているのではないか。そして、「良さ」や「わかりやすさ」を与えているとしたら、それはどのような景観であるのか。それらを考察する必要性があると考え、本研究のテーマを設定した。

本研究の目的は、都市に路面電車のある景観があることと都市住民が都市にわかりやすさや愛着を感じることとの関係性に着目し、その因果関係を明らかにすることである。本研究の調査対象地域は愛知県豊橋市とし、現地踏査及び住民への意識調査を行った。また、考察の軸となる参考文献としてリンチの『都市のイメージ（1968）』を用いた。

2. 先行研究における問題点

まず、先行研究のレビューと路面電車のある都市景観に関わる状況の整理から、2つの問題点が指摘できた。第1は、現在行われている都市のイメージ研究は個々の都市に対する考察が主であり、都市間に共通するイメージを捉えようとする動きは見られない点。第2は、路面電車に関する研究は、都市交通の分野すなわち路面電車に乗る対象として捉えた研究が主で、路面電車を見る対象として捉えた研究がわずかしか見られない点であった。その問題点を解決する方法として、本研究で行った路面電車を見る対象として捉え、その路面電車のある都市景観に対して住民がどのようなイメージを持っているのか明らかにするという研究の価値に言及できた。

3. リンチの理論の路面電車のある都市景観への適用

リンチの提唱した5つのエレメントの理論をもとに、路面電車のある都市景観を考察した。路面電車のある都市景観においては、路面電車とその軌道施設がランドマークとしてパス沿いに展開することで、路面軌道のある通りのパスとしてのイメージが非常に強化さ

れることを明らかにした。豊橋市を事例とした考察では、さらに、路面電車のある都市景観におけるノードの重要性について言及した。主要なパスと路面軌道のある通りとが合流するとき、その合流地点は卓越したノードとなる。それは、路面軌道のある通りと合流する前後では景観に大きな違いが見られ、豊橋市の場合にはそのノードが豊橋市中心部への入り口の役割を果たしていた。

4. 路面電車のある都市景観の住民意識への影響

路面電車のある都市景観は、住民の景観認識に大きな影響を与えていた。図は、豊橋市中岩田の住民が描いた地図をイメージマップとしてまとめたものである。中岩田住民は、路面電車のある通りと主要なパスが路面電車のある通りと合流する地点を軸に都市のイメージを組み立てていた。しかし、路面電車の路線から離れたつつじが丘住民は、豊橋をイメージする際に、路面電車の通りや関連する事項が役立っている様子は見られなかった。

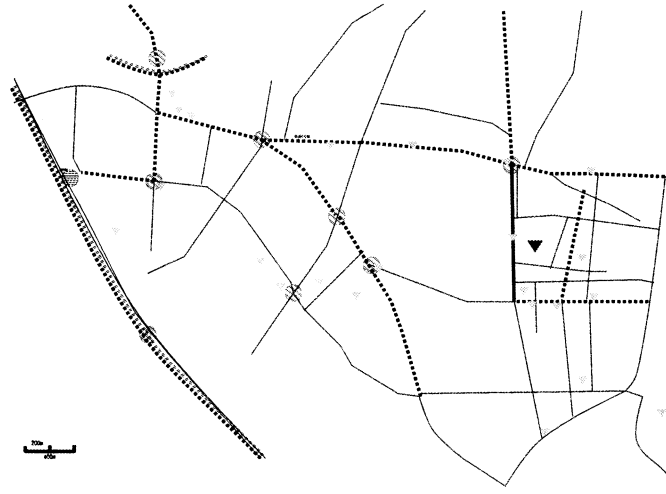


図 中岩田住民のスケッチから引き出された豊橋のイメージマップ

5. 今後の課題

本研究では、路面電車のある都市景観が沿線住民の景観認識に影響を与えていることを指摘できた。しかし、同時に路面電車に対する意識の高さと都市に対する愛着とには関連が薄いことも明らかとなった。今後は、路面電車のある都市景観をどのように都市への愛着へと結びつけていくのかが重要な課題となるであろう。

参考文献

リンチ 1968『都市のイメージ』丹下健三、富田玲子訳、岩波書店。